かえり道 さそい道

前住からの法座お誘い状　第2号

●春のお彼岸

※一月は行く、二月は逃げる、三月は去る…日々の暮らしに追われてふっと暦に目をやればもう三月、春のお彼岸です。

※「暑さ寒さも彼岸まで」、お彼岸は季節の変わり目です。自然の移りかわりを感じる歳時記でもあります。

※その自然の移ろいに呼び覚まされて、古来人々は先に逝った父母兄弟、友人知己を偲びました。その思いに駆られて人々はお寺に足を運びました。そしていつしか季節の変わり目は仏教の大切な行事となりました。

●卒園式

※お彼岸が春分の日という祝日になったのはいいのですが、仏教的な意味がうすくなったのは少し残念な気がします。

※かくいうお寺の幼稚園も保護者が参列しやすいようにと春分の日が卒園式です。その卒園式の栞の言葉をほめて下さった方がありました。

入園する子に　よろこびを
卒園する子に　しあわせを

※種明かしをすれば、この言葉は私が考えたのではなく、ドイツの古都ローテンブルグの城門の言葉を少しかえて拝借しました。

歩みいる者に　やすらぎを
去り行く人に　しあわせを

※これが原文です。町の入口に、旅人を迎え旅人を送る言葉としてラテン語で書かれていたものを日本画家の東山魁夷氏が翻訳し紹介されました。

●真宗の山門

※最初は幼稚園ではなくお寺の山門にこの言葉を拝借できたらとノートに記録していました。

※禅寺の山門には、「葷酒山門に入るを許さず」との言葉があり、厳しい禅の道がそこに示されています。

※「どなたでも普段着で仏法を聞きに来て下さい」という真宗寺院なら、先の言葉がふさわしいのではないかと思ったからです。

※今でも法座のたびごとに、この言葉を思い浮かべつつ皆様をお迎えしています。お寺でお聴聞するとは、まさしく人生に安らぎを得ることですから。

●人生の卒業式は お浄土への入学式

（『癌は宝』鈴木章子著）

※誕生が入学式なら臨終は卒業式です。

※著者は北海道斜里町のお寺の坊守であり幼稚園の園長でした。遺品のノートに、私の死はお浄土への入学式と子どもたちへ書き残されました。

※享年四十七歳、見事な答辞でした。